

女性のがんの純生存率推移

2025年10月29日(水)～31日(金)に開催された日本公衆衛生学会において、シンポジウム58「がん生存率の国際共同研究から考える日本の現状とこれからのがん対策、がん医療」の演者として、Japanese CONCORD-3 Monographでの取り組み結果を発表させていただきました。本取り組みでは、ロンドン大学衛生熱帯医学大学院(LSHTM)の主催するがん生存率の国際共同研究であるCONCORD-3 Studyに国内16施設から提供された2000年～2014年診断症例のデータを用いて、11のがん種・部位を対象とした日本単独で



の5年純生存率の解析が行われました。

シンポジウムでは、「日本における女性に特有のがんの純生存率の推移とがん対策への示唆」というタイトルで、私が担当した乳がん、子宮頸がん、および卵巣がんの結果を発表させていただきました。これらの3つ

のがんは、CONCORDプログラムにおいて世界で最も一般的な女性のがんとして一体的に取り扱われており(VENUSCANCERプロジェクト)、日本人女性におけるがんの約1/4を占めています。いずれのがんも、勤労・出産・育児といった大きな社会的役割を担う若年期～中年期から罹患率が増加するため、社会的にも大きな影響を及ぼしています。純生存率はPohar Perme法を用いて推定され、がん種別に暦年(2000-2004年、2005-2009年、2010-2014年)・年齢層・組織型・SEER Summary Stage(登録のあった3県のみ)で層別化して行われました。いずれの部位でも、対象期間を通じて全体の5年純生存率は向上しており、特に領域進展例を中心とした向上が目立ちました。同時期の他国との国際比較では、日本はいずれのがん種でも高所得国中で一貫して上位の水準を示していました。一方、予後不良の組織型や遠隔進展例(乳がん)、高齢者(子宮頸がん、卵巣がん)における純生存率の向上は限定的でした。結果を通じて、乳がんや子宮頸がんの検診受診率向上による限局例割合の増加や、2000年以降の周術期の集学的治療の開発・普及の生存率に対する寄与が示唆され、これら3がんをとりまく医療環境の改善が実感された一方で、遠隔進展例、高

WATANABE Kaname

渡邊 要

神奈川県立保健福祉大学
神奈川県立がんセンター
JACR 専門委員



齢者、特定の組織型など改善から取り残された集団に対してどのようにがん対策を講じていくかという課題も強く意識されました。

今回一緒に演者を務められた国立がんセンターの西尾先生(担当:肝・膵がん)、大阪国際がんセンターの中田先生(担当:小児がん)のご発表についても、それぞれ異なる角度からの考察があり興味深く拝聴いたしました。討論後の西野先生の指定発言では、全国がん罹患モニタリング集計に基づく2012-2015年診断例の都道府県ごとの5年純生存率の結果が示され、標準化された手法で継続的に比較評価を行い、改善の取り組みに繋げることの重要性があらためて実感されました。今回発表した内容は、今後11のがん種・部位と全体のまとめの計12本の論文のうちの1本として出版される予定です。公衆衛生学会の場で成果を発表できたことで、JACRにご所属でない先生方や行政の皆様にも本取り組みについて知っていただくきっかけになれば嬉しく思います。

私がJACRの取り組みに参加させていただいたのは今回が初めてとなりますが、本取り組みを通じて大変貴重な経験をさせていただきました。3部位のがんを担当させていただくことになり、それぞれの背景の違いに四苦八苦しつつも、先生方のコメントに励まされながらなんとか形にすることができました。当初は右も左もわからぬ中ではありましたが、思い切って手を挙げて良かったと感じています。

本取り組みのとりまとめをいただき、論文執筆から学会発表まで丁寧にご指導くださいました杉山先生、的確で有用なコメントをくださった monograph 著者の先生方、Japanese CONCORD-3 Working Group ならびに LSHTM Cancer Survival Group の先生方、そして本シンポジウムにおいて座長をお務めいただきました松田先生、大木先生、その他ご関係の先生方にこの場を借りてあらためて感謝申し上げます。

